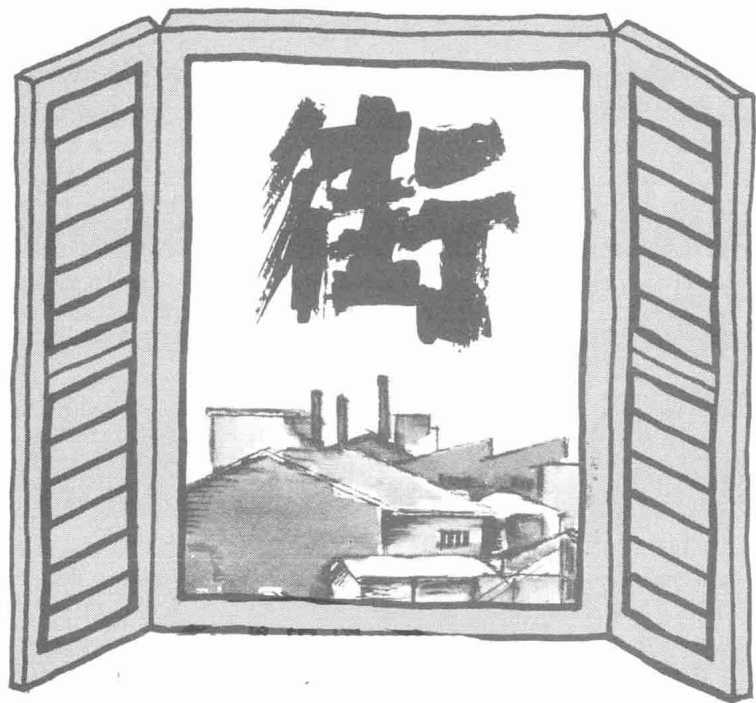




若者たちは、今
山内 久

同時代叢書
汐文社



同時代叢書

汐文社

著者紹介

山内 久（やまのうち ひさし）

1925年，東京に生まれる。東京外語大卒。

1950年，松竹大船撮影所脚本部に入社。

1959年，松竹を退社，以後フリーのシナリオライター。

主な作品「豚と軍艦」「私が棄てた女」「幕末太陽伝」「若者たち」他。著書に『アッシイたちの街』（汐文社）がある。

街 若者たちは，今

同時代叢書

1982年3月25日 第一版第一刷発行

定価 1000 円

著 者 山 内 久

発行人 吉 元 尊 則

発行所 (株) 汐 文 社

東京都文京区本郷 1-26-10 中村ビル

電話03 (815) 8421 振替(東京)2-14150

印刷 菊部印刷 製本 東京美術紙工

目次

プロローグ 火災 5

第一章 律子の土曜日 9

第二章 祝福と失踪と 75

第三章 流転のきっかけ 131

第四章 壊されざるもの 179

第五章 別離と希望 201

装帧 I N O 企画・高田宣子
イラスト 富沢粧子

街

若者たちは、
今

プロローグ 火災

夕日が沈んで、京浜工業地帯に街の灯が点々と輝きはじめた頃、爆発事故は起きた。

轟音、次いで炎が電柱よりもずっと高く吹き上がった。火元の工場はスレートぶきの木造だった。いったん収まったかにみえた炎は、工場内の油類に引火したのか、床をはい、工場を押し包むように広がって、敷地内を呑み込んだ。

「火事だァー」

「一一九番しろッ」

人影が、炎の中を走る。逃げまどう人間が、次つぎと倒れていく。ものすごい黒煙が吹き出し、それが赤い炎と不気味にとけあって、夜空を焦がした。

サイレンの音が響き、近くの工場からは、野次馬が駆け出した。

道路はその野次馬と、急行した数十台の消防車であふれた。消防車からは蛇のようにホースが伸び、ハシゴ車につながれ、放水が始まった。が、風にあおられ燃えつつける炎は、放水を

あざ笑うように、バチバチと音をたてた。

「アオイ精機が燃えてるぞ」

「わあ、すごい」

野次馬たちは、炎で顔を赤く染め、熱さに尻込みしながら、みつめていた。消防夫が、その人込みの中を走り回り、警官が、野次馬を押し戻した。

火を吐く工場の中では、衣服を焦がし、半狂乱になった工員たちが、走り回り叫びあっていた。

その中に、工藤律子もいた。律子は煤だらけの比嘉裕一とぶつかりかけた。

「比嘉さん！ みんなは？」

「わからん、古河の姿がみえないんだ」

「兄ちゃんッ」

比嘉の妹の和子が、消防車のホースの水を浴びたのか、濡れネズミになって走ってきた。

「和子ッ、大丈夫だったかッ」

「節子さんが、まだ中にいるのッ」

「えっ」

律子が炎の中に動く人影をかすかにみた、と思った瞬間、比嘉は窓ガラスを叩き割って中へ

飛び込んだ。

「あつ、比嘉さんッ」

「お兄ちゃんッ」

二人が後に続こうとしたとき、燃えた柱が倒れなかった。

「危ないッ、死ぬぞッ」

知念と新里が、律子と和子の腕を引っ張った。メリメリと音をたてて、天井が崩れ落ちた。

火の粉と炎が一段と大きく舞い上がった――。

「お兄ちゃんッ」

和子が絶叫した。

夜遅くなって、やっと火は収まった。工場の腰板は消し炭のようになって、ところどころ小さな炎をチヨロチヨロと吐き出したが、水びたしの工場内には、もはや、燃えるものはなかった。天井はなく、焼け焦げた機械が、あちこちに黒い固まりとなって残っただけだった。

遺体が次つぎと発見された。比嘉裕一、上原節子、ミドリ、古河芳男、パートのツネさん。

工藤律子は、ただ茫然として、これら遺体がタンカに乘せられ運び出されるのを眺めていた。涙も出なかった。ついさっきまで、山中湖で、ともに歌い、ふざけ、スケートをし、ワカサギ

釣りをしていた働く仲間たちである。

頼もしい比嘉、胸の大きいのが自慢だったミドリ、まだ幼さの残っていた節子、結婚したばかりの古河、亭主おもいのツネさん――。

“これは夢なんだわ、こんなひどいことが起こるはずはない。夢なんだわ、きっと……”

律子はずぶやいた。体から力が抜け、ここ二カ月の出来事が、すべて夢だったように思えてきた。

第一章 律子の土曜日

1

夜明け前の京浜工業地帯は意外に静かである。

空が濃紺から薄みがかった赤へと変わっていく。やがて明るい朝を迎える海と陸。その境界にそびえるのが巨大なコンビナートの煙突群である。

運転開始とともに煤煙を吐き出す煙突の群れも、まだ眠りからさめない。敷地内のパイプラインも、原油を呑み込んだまま脈動していない。

ただっ広い産業道路は、交差点の信号を黄色に点滅したままだ。まるで「勝手に判断しろ」といわんばかりである。

その信号を突っ切って一台の競技用自転車、工藤律子の住む県営アパートに向かって疾駆していく――。

その頃、律子は枕元の目覚し時計で飛び起きるのだ。隣で寝ている弟の洋一を蹴とばし、電気釜のスイッチを入れ、ガスに点火する。麦湯をつくるためだ。

「今頃、雄次さんは市営埠頭を走っている」

雄次がペダルをこぐ姿が、目の前に浮かぶ。きつと、この県営住宅の頂上にあたる朝日をつめ、水を撒くような音をたてて、銀輪を回転させているに違いない。

律子より三歳年上の雄次の脚は、長く、筋肉が盛り上がっている。半ズボンから伸びる、そのたくましい脚は、律子には少しまぶしい。

手早く麦湯をつくり、ポットに入れる。

雄次は洋一の先輩でもある。定時制高校二年の洋一が働いている町田自動車に、かつて雄次も勤めていたからだ。洋一が「雄次さん、雄次さん」と慕い、その洋一を通じて、律子も知りあった。

しかし、いまの雄次は、父親の経営する小さな機械部品工場で働くかたわら、競輪選手を目ざして毎朝トレーニングに励んでいる。いや、もはや、競輪選手のテスト合格が雄次の何よりの生き甲斐であり、旋盤を回すのは二の次になっているといってもいい。

雄次の真剣な姿には、律子も少なからず打たれるものがある。二十歳の律子も、一緒に走っているように心が弾むのだ。

ふと、律子は奥の部屋をのぞいた。予想通り、布団の中に母親てる子の姿はない。

“やはり……”

律子は、もう慣れているはずの早朝の情景なのに、顔がくもるのを覚える。てる子が朝帰りをするようになって、もうかなりになる。いや、これも母親の仕事の延長なのだと、何度自分にいいかせようとしたことか。

小さなバーを営む中年の母親に、多少の男関係があるのは仕方がないことだろう。そうは思うが、ここ数カ月のてる子の行動は目にあまる。酒と男の臭いを体にしみ込ませて、よろよろと帰ってくる姿は、何かにとり憑かれた感じさえするのだ。

“私は母のようにほなりたくない”

てる子の生きざまに触れるたび、律子はその思いを噛みしめる。

“男にすがりつくような生き方なんて、絶対いやだ。愛するなら、まっすぐひたむきに愛したい。そして、愛する人の力になれるような自分でいたい”

律子はバジャマを脱ぎすて、敏速に着替えながら洋一の頭をポンと打つ。

「起きなさいよ、たまには布団をヒンむかれないうちに」

洋一は、

「……うーん」

というなり、またフトンの中に潜る。律子は三十分後に目覚しをセットして洋一の耳元に置くと、ドアから飛び出した。

県営団地のホールの前で、いつものようにストップウォッチを構える。百メートル先の曲がり角に雄次の姿がみえたら、ストップウォッチを押すのだ。

千メートル一分十三秒がテストの合格ラインである。つまり、百メートル七秒三のスピードが必要なのだ。

雄次がみえた。みるみる姿が大きくなる。顔が紅潮している。全力をふりしぼってペダルをこいでいる。目の前を通過した。律子は大きく右腕をふった。

雄次は、律子がストップウォッチを押すのを横目で確認して、大きくターンした。

「何秒だい」

息を弾ませながら雄次が聞く。

「七秒、六」

「……六か」

律子から受けとったタオルで顔の汗をぬぐいながら、雄次はため息をついた。

「大丈夫よ。最後の百が、いつもこのくらい出るようになれば」

「……」

「あせらず行こう」

と律子は雄次に微笑んだ。

「はい麦湯よ」

「ありがとう」

律子は、雄次が競輪学校に合格してからは、誰がこんな面倒をみるのかしらと、ふと思った。そのとき、一台のタクシーが止まった。降りてくる中年の女は、律子の母てる子だ。

くわえていた煙草を中の男の客にやり、手をふっている。早朝、男に家まで送らせる女は、てる子ぐらいのものだ。

律子の頭にカッと血が逆流する。いつものこととはいえ、母親のふしだらな姿を雄次の前でみせつけられるのは辛い。

てる子は、律子と雄次を認め、ぎこちなく会釈する雄次に口元で笑った。が、その眼は笑っていない。律子の睨みつける視線をハネ返すように踵を返した。ただ、負けん気だけが批判の眼と太刀打ちできるといように。

だが、てる子はバランスを崩し、よろよろと倒れかかった。

「お母さん」

助け起こそうと駆け寄る律子を、てる子は突きのけた。

「ほっとしておくれよッ、いちいち！」

「……」

「うるさいんだよ、お前は。お巡りの子だから」

二言目にはてる子が発する言葉である。巡査だが、バクチにのめり込み、そのため多額の借金を残して若死した夫。この夫をてる子は憎悪しつつけ、その憎悪をよりどころに律子を攻撃するのだ。律子は、父親を弁護する言葉を知らない。それがてる子の狙いともいえた。

律子が黙っていると、てる子は荒々しく着物の裾をはらい、立ち上がると、よろよろと一号棟へ歩き出した。

「じゃあね」

「……」

律子は雄次に、自分でもわかる歪んだ笑顔をみせ、てる子の後を追った。エレベーターホールでてる子に追いついたが、それより早く、てる子はエレベーターに乗り込み、ドアを閉じた。ドアは鼻先で親と娘を分断した。

雄次の視線に気づいて律子がふり返ると、雄次は黙ってうなずいていた。

その優しい眼をみて、律子は無理に笑顔をつくった。それでもしないと、涙が出そうだった。雄次は競技用自転車をコンクリートの壁に立てかけると、律子に歩み寄った。